説教「イエス様に従う道」（ﾏﾀｲ 8:18-22）　2000.1/30
（招詞(詩編 100:1-5),546,79,124,235,544,交読 3(詩 8 篇)）
（於・渋川教会）　小鮒　實 牧師

イエス様は多くの人たちの病気を癒されました。マタイ福音書の今までの所には、重い皮膚病を患っていた人のいやし、また、百人隊長の僕のいやし、そしてペトロの姑のいやしという、そういう非常に具体的なお話が載っておりましたので、それらを一つ一つ見てまいりました。このほかにも、イエス様は多くの病人を癒されたようで、マタイ福音書の４章 23 節以下の所には、このように記されております。少し前ですが、マタイ福音書４章 23 節以下、「おびただしい病人をいやす」という所。
「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」(4:23-25)。

ここの所は、説教では詳しく取り上げませんでしたけれども、でもとにかく、イエス様はガリラヤ地方を中心に宣教活動を行い、多くの人たちの病気を癒された訳であります。病気というのは、いつの時代でも、現実的な痛み、苦しみを伴うもので、常に大きな問題であります。その病気をいやすお方が現れた。とすれば、誰でもその人に引き寄せられるのではないでしょうか。先程の所には「大勢の群衆が来てイエスに従った」とありますが、病気を治す人が現れた、奇蹟を行う人が現れたとすれば、その人の所に、多くの人が引き寄せられて行くのも、それはそれなりにうなずけると思うのであります。しかし、ここには大きな落とし穴があります。というのは、そういうイエス様に従う多くの人たちというのは、自分勝手な所が少なからずあるからであります。つまり、イエス様が自分たちの要求をかなえてくれる、いわゆる御利益を与えてくれるという、そういう自分たちのメリットのためにイエス様に従うという、そういう側面もあるからなんでありますね。今で言う「御利益宗教的な側面」というのでしょうか、そういうところが少なからずある。イエス様は、べつに人々に御利益を与えるためにこの世に来られた訳ではありませんが、でも、人々の目には、そんなふうにも移ったのであります。

確かに、イエス様は不思議な力によって病気を癒しました。先週学びました所にも、イエス様の所に連れて来られた病人は「皆いやされた」とあります。ですから、沢山の人たちがイエス様の所にやってきた。そして、イエス様を慕い、イエス様に従って行くという人も実際沢山現れたのであります。しかしながら、イエス様に従っていくというのは、イエス様に従って行けば「きっと何かいいことがある」「御利益がある」というような、そういうことだけでいいのでしょうか。

今日の所には、イエス様に従っていくと言ったという二人の人の例が取り上げられております。一人は「ある律法学者」の例、それからもう一人は、イエス様の弟子の一人とありますが、この二つの例から、イエス様に従うということがどういうことなのかということを、今日もう一度皆様とご一緒に学んでみたいと思います。

ということで、先ず律法学者の例。ある律法学者がイエス様の所に近づいてきて、こんなことを言ったといいます。「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参

ります」。それに対して、イエス様は、このように答えられました。
「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」。
簡単なお話、会話でありますけれども、注意深く読みますといろいろな問題がここにはあるようであります。

先ず、律法学者の語っている「先生」という言葉、律法学者は、イエス様に「先生」と呼びかけている訳ですけれども、この「先生」（ディダスカロス）という言葉は、ヘブライ語では「ラビ」という言葉になります。当時ユダヤ人は、すぐれた教師を呼ぶとき、この「ラビ」という言葉をよく用いたといいます。ラビ、先生、それは確かにすぐれた教師に対する尊称なんですけれども、逆に言えば、この律法学者は、そういう意味でしかイエス様を見ていなかったとも言える訳であります。この世には「先生」と呼ばれる人たちが沢山おります。学校の先生をはじめ、代議士や医者や弁護士、牧師だって先生と呼ばれたりいたします。それは、習慣もあるかも知れませんけれども、とにかく、先生という言葉が氾濫している。実際、この世には「先生」と呼ばれる人たちが沢山いるのでありますね。イエス様時代だって沢山の「教師」「先生」がいました。しかし、イエス様の場合、単なる「先生」という言葉で表現し得るものなのでしょうか。確かに、イエス様はすばらしいことを教える教師だったかも知れません。山上の説教なんかを見ますと、確かにイエス様はすばらしい事を沢山教えられました。人々は、そういうイエス様の教える言葉に非常に驚いたとあります。そして、イエス様の中に、律法学者以上の権威ある教師、先生の姿も見たのであります。あるいは、イエス様は、今日最初に見ましたように、多くの病人もいやしました。イエス様は確かに奇蹟を行う偉大な人物、先生だったかも知れません。しかし、それだけなんでしょうか。

聖書は「イエスは主である」と、こう言います。「主」というのは、権威者に対する尊称、また奴隷が主人に対して「ご主人様」と呼ぶ場合に用いられることもありますけれども、聖書では「神様」の事を「主」と、こう呼ぶのであります。先生という呼び方も敬意を払うという意味では、大切かも知れませんが、イエス様を呼ぶのには、神様というニューアンスがある「主」という呼び方の方がずっとふさわしいのではないでしょうか。次のお話に出てくるイエス様の弟子の一人は、イエス様の事を「主よ」と呼びかけております。「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」。まあ内容はともかくとして、イエス様に対しては、「先生」と呼ぶよりも、この弟子のように「主よ」と呼んだ方がずっとふさわしいのではないでしょうか。

今お話しております律法学者、この人は、イエス様の中に、民衆を指導するすぐれた指導者の姿を見、この人についていけば何かが得られる、よい指導が受けられるというような、そんな意味で「先生」と呼びかけ、イエス様につき従って行きたいと思ったのではないか。要するに、この律法学者は、イエス様をラビの一人として、単なる人間の指導者、そんなふうに見ていたということが言えるのではないかと思うのであります。
（イエス様をどのように見るか、単なる偉大な人と見るか、神の独り子と見るか、人によって見方はいろいろあると思うが、私たちはイエス様の中に単なる先生以上のものを見たい）

ところで、もう一つこの律法学者の言葉で気になる表現があります。それは彼が「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」という、この言葉であります。イエス様の行かれる所ならどこへでも、たとえ火の中、水の中どこへでも従っていくというこの表現。確かに、この気持ち、分かりますけれども、こんなこと簡単に言っていいので

しょうか。イエス様に従うということがどういうことなのか、本当に分かっているならば、なかなかこんなことは言えないのではないでしょうか。

私は、この律法学者の言葉を聞く時、ペトロの次のような言葉を思い起こします。ペトロは、イエス様が「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく」と言われた時、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と言ったのであります。また、イエス様が「あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言った時、ペトロは、「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」とまで言った。分かるのであります。この気持ちは。しかしながら、現実の私たちは、そう簡単にこういうことは言うべきではないのではないでしょうか。要するに、よく分からないのに口だけが先行する、言葉だけが先に出てくる、そういうあり方はやはり注意しなければならないと思うのであります。感情的に、つい先走ったことを言ってしまう。あるいは、現実に出来るか出来ないか分からないのに、出来ると断言してしまう、それは自信過剰にもなってまいりますし、注意しなければならないことだと思うのであります。

イエス様の所にやってきた律法学者、彼は「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」とイエス様に言う訳ですけれども、この言葉、なんとなく空々しく聞こえるのは私だけでしょうか。勿論、この人は本気でそう思って言ったのかも知れません。でも、自信過剰とも思えるこの言葉、なんとなくひっかかるという人もいるのではないかと思うのであります。

ところで、この律法学者の言葉に対して、イエス様は「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」。このように言われました。狐には、寝るための穴があり、また、空の鳥にも巣があるけれども、イエス様には、枕する所もない。寝るところさえない、安らぐ所がないというのであります。それでも、あなたは私に従ってくると言うのか、イエス様はそのように問い返されたのであります。このイエス様の言葉は、かなり厳しいものでありますけれども、でも、これはイエス様の現実を語った言葉と言ってもいいと思うのでありますね。実際、イエス様は、ゆっくりと安らぐような、そんな時間もなく、毎日毎日、本当に埃だらけになって活動いたしました。イエス様の公生涯はおよそ３年ということが言われておりますけれども、３年の間、イエス様はガリラヤ地方を中心に、あちこち行かれ、神の国の福音を語られました。時には、誤解され、命をねらわれることもあり、そして最後には実際に逮捕されて殺されてしまいました。それがイエス様の道だったのであります。そのイエス様に従っていく、それはそう簡単な道ではない訳であります。厳しい道、困難な道、苦難の道、そんなふうに言ってもいいと思うのであります。ですから、イエス様「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」と、こんなふうに言われたのだと思うのであります。

律法学者は「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」とイエス様に言う訳ですけれども、イエス様に従っていくというのは、決して生易しい道ではないのであります。「ラビ」「先生」と呼ばれる一宗教者に従って行けば、将来きっと何かいいことがあるというような、そんな道ではない。生半可な気持ちでは、イエス様に従っていけないのであります。律法学者というのは、当時のユダヤ社会では、上流階級の一員であった人が多かった訳ですけれども、そういう人たちに、彼らが描いていた幻想をうち砕き、イエス様に従っていく道の厳しさを、イエス様このような言葉を語ることによって教えられたのではないでしょうか。

ところで、もう一つ、今日の所には、既に弟子としてイエス様に従い始めている人の話が載っております。21 節以下、このようにあります。
「ほかに、弟子の一人がイエス様に、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言ったというのであります。それに対して、イエスはこのように言われました。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」。

この会話ですけれども、これにはいろいろな解釈があります。普通は、イエス様の弟子の父親が亡くなったので「父を葬りに行かせてください」と言いましたら、イエス様は、死者を葬ることは、この世の人、霊的に死んでいる人たちに任せて、あなたは私に従いなさいと言ったという、そういう解釈をするのですけれども、こんな解釈もあります。先ず、弟子の一人が「父を葬りに生かせてください」と語ったという、この言葉ですけれども、これは「父親が死ななければ、家を留守にするすることは出来ないので、それまでまってくれ」と躊躇したので、イエス様は、この世のことは、この世の人にまかせて、あなたは私に従って来なさいと勧めたというような、そういう解釈をする人もいます。いずれにいたしましても、ここでは「イエス様に従う」、しかも直ちに従う、すぐに従うということが問題になっている訳ですけれども、そうしますと、先程の律法学者のお話とちょっと食い違うような、そんな印象を持たれる方もおられるかも知れません。イエス様は律法学者には、イエス様に従っていく道は、非常に厳しい道であるから、十分よく考えろと説いているように思える訳ですけれども、弟子には、何はさておいても、先ず「私に従って来なさい」ということで、結論を急がせているような、そんな印象を受けます。ということになりますと、イエス様の真意はどこにあるのか、ということになる訳でありますけれども、実はどちらもイエス様の真意なんだと思うのであります。

イエス様は人によってお話の使い分けをされているのであります。この人には、こんなふうに言わないと分からない。この人には、こう言った方が分かってもらえる。そういう使い分けは私たちだってしております。イエス様もそうでありまして、律法学者には厳しい道を説き、弟子には、直ちに従うよう勧めている訳であります。これは矛盾ということではなくて、むしろイエス様の配慮と言った方がいいと思います。いずれにいたしましても、今日の所、ここにはイエス様に従う道が示されております。イエス様に従う道は、必ずしも生易しいものではありません。前に出てきた聖書の言葉で言えば、狭い門と言えるかも知れません。でも、狭き門だから、あきらめるというのではなくて、私たちは、積極的にそれに立ち向かっていくという、そういうあり方が出来ればと思います。「たびじ」にも載せておきましたが、三浦綾子さんの「泥流地帯」という小説の中に、こんな言葉があります。「難儀なことだからやってみる。楽なことなら誰でもやるさ。しかし、難儀なことは、やる気のある者でなければやれない」。

信仰者の道は、必ずしも楽な道ではないかも知れません。でも、神様の豊かな恵みと祝福が与えられる道なのですから、私たちやる気を出して、立ち向かって行ければと思います。難儀なことだからこそやってみる。難儀なことだからこそまた価値のあることなんだと思います。イエス様に従う道、難儀かも知れませんけれども、神様の祝福をいただく道でありますから、神様に導かれて、歩んで行ければと思います。